

常照

第780号

「人は二度死ぬ。」

先日、子供たちと一緒に「リメンバー・ミー」というアニメの映画を見ました。その映画の内容は、主人公の少年と亡くなった自分のご先祖たちとの絆や心の交流を描いたアニメでした。

その中で、亡くなった人は「死者の国」というところに暮らしていて、自分の子孫たちがきちんと祭壇に写真を飾って忘れないでいるうちは、そこで生き続ける

ことができ、「死者の日」（日本で言うお盆のようなものでしょうか）には、現実の世界と行き来することができのですが、反対に子孫たちの誰もがその故人のことを忘れてしまうと、その人は体ごと死者の国から消滅してしまうということでした。

その映画を見ていて思い出したことがあります。学生として仏教の教えを学んでいた時に、ある先生が講義の中でおっしゃった言葉「人は二度死ぬ。一度目は肉体の死。二度目はみんなから忘れ去られた時だ」。この映画もこのことがテーマになっっているんだなと感じました。

その言葉の典故はわかりませんが、人を追悼していくこと、わかりやすく言えば亡き人をいつまでも忘れないでいるこ

との大切さを教えるための言葉であろう
と思います。

「死」と「恩」を忘れて

ではなぜ亡き人を忘れないでいること
が大切なのか。なぜ仏教の講義でその言
葉が出てきたのか。

一つには、亡き人を忘れるということ
は、「死」ということと自体を忘れていくこ
とになるからだろうと思います。自分も
必ず死ぬんだということを忘れていくと
いうことです。それは言い換えれば、私
たちのいのちの事実を目をつぶってしま
うことです。生と死は一つのことである
のに、それを二つに切り離して、生のみ
に価値を見出して、死を悪として考える。

そうして生き方自体が、自分の都合のい
いことばかりを追い求めて、都合の悪い
ことは他人のせいにしたたり、こんなはず
じゃなかったと愚痴を言いながら生きて
いくことになり、自分の人生を貶めてい
くことになるわけです。

もう一つには、私たちが亡き人を忘れ
るといふことは、それはその人からいた
だいてきた「恩」を忘れるということに
なるからだろうと思います。

つながりの中身

ある研修会で「自分で自分自身のこと
全部できたら、人は一人ぼっちになつて
しまう。他人に迷惑をかけるということ
は、その人とつながりをもつことなんだ。

生きるっていうことは、たくさんのいのちとつながりをもつことなんだ」(小学校6年生の詩)ということを教えていただきました。今、私たちは実際にいろんなつながりや関わりの中を生きています。様々な場面において、人との関わりを抜きにしては生きられないということは、誰にでも当てはまることだと思えます。そしてその関わりというのは、人に迷惑をかけていくということだと言います。ということとはつまり、今私たちが実際にこうして関わりの中で生き続けているということとは、その迷惑を許し、関わり続けてくれる人がいるということになると思えます。そして亡き人もまた、その迷惑を許してくれた人の一人であるわけです。

私たちのそういった様々な人からの恩を知ることもなく、自分の都合のいいことばかりを追い求め、死という事実を目をつぶり生だけがすべてだとして生きるその人生を、親鸞聖人は「空過」(空しく過ぎる)していく人生だと教えて下さったのではないのでしょうか。

私たちが亡き人のことを忘れずに御命日や年忌法要などでお参りをするこの大切さは、そういうところあるのではないかと思えます。亡き人を縁としてご本尊に手を合わせることをとおして、日頃目をつぶってしまっている死といういのちの事実をしっかりと受け取り、人からいただいている恩に目を開いて生きていく、そういう豊かさのある人生をいただいていくのです。

二〇一九年度年回表

一周忌	平成三十年	寂
三回忌	平成二十九年	寂
七回忌	平成二十五年	寂
十三回忌	平成十九年	寂
十七回忌	平成十五年	寂
二十三回忌	平成九年	寂
二十五回忌	平成七年	寂
二十七回忌	平成五年	寂
三十三回忌	昭和六十二年	寂
三十七回忌	昭和五十八年	寂
五十回忌	昭和四十五年	寂

一月の常例布教(法話)のご案内

○前期 一月九日(水)～十一日(金)

大阪教区 島中南組 明教寺

講師 葭田 誓子 師

○後期 一月十三日(日)～十六日(水)

大阪教区 石川南組 専光寺

講師 多田 大樹 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。

どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院
くださいますよう、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四番
FAX (〇一三四) 二二一四〇八番
テレホン法話 二七一一六一番